

秋田遠景近景

日銀秋田支店長コラム

今月初旬まで秋田県立美術館と秋田市立千秋美術館で開催された「ミネバネ！ 現代アート タグチアートコレクション」を遅ればせながら鑑賞した。いずれも入門編として素晴らしい作品ばかりであり、こうした珠玉のコレクションを巡回させて現代アートの普及に努めるタグチアートコレクションや、秋田での開催にこぎつけた両美術館には敬意を表したい。

来場した多くの親子連れが、弘前市出身の奈良美智さんの描いた不思議な表情の女の子に見入っていたり、「みて、絵の中に日本が隠れてる！」「あ、ミッキーとミニーだ！」と純粋に面白がっていたりした様子は、主催者の狙い通りではなかったか。

ただ、こうした芸術の世界も、金勘定とは無縁ではいられない。

地方のアート

い。むしろ、現代アートこそ、景気動向に大きく左右される業界だと言えるだろう。

例えば、「ミネバネ！」にも展示されていた英国を代表する現代芸術家、ダミアン・ハースト。氏の作品の中でもとくに有名なのは、ヒツジやサメなどの動物をホルマリン漬けにしたシリーズ。私がロンドンに駐在していた2008年にサザビーズで落札された、黄金に装飾され

万ポンド（約2千万円）くらいの価値はあるのかな」とブラックジョークを飛ばしていたほどだ。ちょうど落札のタイミングとリーマン・ショックがまさに同時期であり、最高落札価格がその後更新されていないことから、バブル景気が氏の作品を押し上げたと皮肉る声も多いという。

この夏、「地方には本当の芸術がない」と捉えられかねない美術関係者によるSNS投稿が

特徴生かし美の発信を

た牛の作品は、なんと1030万ポンド（約20億円）もの値段がつき、衝撃を巻き起こした。

あるキャスターは、「自分もホルマリン漬けになったら、10

炎上した。確かに、美術館や企画展の数、上映される映画の本数といった指標では、地方と都会で差があるのが現実だ。それは人口だけではなく、経済規模

きいという。国内に目を向けると、広く知られた現代アートの祭典として、3年に1度の瀬戸内国際芸術祭が本年も開催されている。香川・岡山両県にまたがる一大

による面が大きい。

しかし、都市偏重に抗する流れも、アートの隆盛がもたらした。美術商が次に成功しそうな作品を大規模に展示し、商談を行う展示会が世界中で開かれている。

今では芸術祭の中心地として、

9万人以上の観光客が訪れるようになってい

「ミネバネ！」を鑑賞しながら、秋田の各市町村が、それぞれ特徴あるアートで結ばれるようなネットワークはつくれないかと夢想した。すでに横手には世界一の原画収蔵数の増田まんが美術館や秋田蘭画を所蔵する県立近代美術館、角館には平福記念美術館がある。移動距離が長いのはどうしても当地の弱点ながら、それぞれの観光資源と結びつけた「アート」が構想できないだろうか。

県立美術館にて、藤田嗣治の「秋田の行事」をじっくりと鑑賞する機会も得た。豪商・平野政吉による構想が、年月を経て秋田の美術シーンに多大な影響を与えたことを踏まえると、当地にもアートを起爆剤として人々をさらに引きつける潜在能力は十分にあるとみるが、いかがだろうか。

（種村知樹・日本銀行秋田支店長）

〈随時掲載〉

